

### 1 はじめに

上益城郡は、坂本政司会長（蘇陽中学校）を中心に、8校15名の研究員で構成され、教科等研究会の活動を中心として研究を進めている。今年度は、令和3年度の新学習指導要領完全実施に向け「主体的・対話的」や「単元のゴール」をキーワードとして、研究テーマを設定し、各学校で取り組みを行ってきた。テーマの実現のために特に重視したのが「単元のゴールの姿」の設定である。この「単元のゴールの姿」を明確にするために、単元毎に学習構想案を作成して、授業を行うことを共通実践事項とした上で「①主体的な授業のための取り組み」、「②対話的な授業のための取り組み」、「③単元のゴールを意識させるための取り組み」の3つを柱として研究を進めた。また、上益城郡では長年に渡って体力向上に向けた取り組みを行ってきた。その成果として、徐々に本郡生徒の体力は向上傾向にある。しかし、依然として体力・運動能力調査の結果では県や全国平均を下回る種目が多い。そこで、各学校での体力向上に向けた取り組みも引き続き実践するようにした。

更に本年度は研究授業に上益城教育事務所の原田指導主事を招聘し、助言をいただいた。更に、熊本県立教育センターの山科主事を講師として招聘し、新学習指導要領についての講話をいただく予定であったのだが、熊本県の緊急事態宣言発令により中止になった。このように、会員以外にも協力を得ながら研究を深めようと考えた一年であった。

### 2 研究テーマ

**主体的・対話的に取り組み、体力を高める体育授業**  
～「単元のゴールの姿」を設定した授業づくりを通して～

### 3 研究組織

- 部長 坂本 政司（蘇陽）
- 理事長 有働 秀樹（益城）
- 部会及び研究員

部会	中体研発表大会準備部会	夏期研修会準備部会	意識調査部会
重点事項	令和4年度の中体研発表大会に向け、研究テーマの設定・研究授業の準備を行う。また、授業者・授業内容の検討を行う。	令和3年度の夏期研修会に向け、講習会の内容・講師の検討や、場所の検討を行う。	体力・意識調査を分析し、本郡生徒の課題を明らかにする。その明らかになった課題を基に来年度の研究構想を検討する。その研究が再来年度の発表大会の材料となる。
チーフ	有働 秀樹（益城）	武田 雅裕（益城）	倉岡 武（蘇陽）
研究員	顧問：坂本 政司 岩田 聡（御船） 松本 巧（清和） 藤野 博文（嘉島）	村上伸一郎（御船） 中尾 祐毅（木山） 藤原 一也（矢部） 瀬戸香菜美（甲佐）	米田 豊一（甲佐） 廣津 俊英（木山） 松尾 成也（嘉島） 竹元 政敬（益城）

### 4 活動状況

(1) 【7月6日（月） 郡教科等研究会 半日研修（益城中学校）】

- ①役員選出
- ②研究テーマ、サブテーマの検討
- ③年間計画作成

(2) 【11月20日（金）研究授業 半日研修（木山中学校）】

球技「バスケットボール」 授業者：廣津 俊英教諭（木山中学校）

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すためには、オリエンテーションの充実が不可欠であるということを提起した授業であった。オリエンテーションで「単元のゴールの姿」がイメージできるよう、プロバスケットボール選手のプレーする動画を視聴させたり、現在の自分の課題が明確になるように、試しのゲームを行ったりする等、生徒に見通しをもたせることのできる授業を実現されていた。よい体育の授業には「勢いがある」、「雰囲気が良い」という条件があるとよく言われるが、生徒が5分間走や補強運動時に全力を出して運動する様子や、話し合い活動での仲間の意見を大切にしながら、考えを深める様子は、まさによい授業の条件に当てはまったものであった。



【単元のゴールの姿を掲示する】



【試しのゲームで課題を確認する】



【チームの課題を話し合う】

## 5 まとめ（成果と課題）

### ①生徒が主体的に取り組む授業づくりについて

生徒が教師の指示を待つだけの活動では「やらされている」という受け身な気持ちになり、積極的な動きにはつながらない。では、生徒が「やりたい」、「自分たちの力でやっている」という気持ちになり、主体的に動くためには何が必要なのか。それは、「単元や授業への見通しがもてること」や、「今日の授業内容を振り返り、次の授業での目標を立てる時間があること」だと考えた。まず、見通しをもてるようにするために、単元計画表や授業の1時間の流れを示したメニューボードの掲示を共通実践事項とした。これにより、生徒は単元目標や単元全体の見通しをもてると共に、毎時間の学習のめあてや流れを理解して活動ができるようになり、結果として教師の指示が無くても、生徒が主体的に活動する場面が増えた。また、このことは見通しをもって行動することが苦手な支援を要する生徒にとっても有効な手法であったと考える。

### ②生徒が対話的に取り組む授業づくりについて

ペア学習やグループ学習の時間を多く設定し、生徒同士で課題解決に向けた学習ができるようにした。その際、ただ「話し合いなさい」と指示するだけではなく、「何について教え合い、話し合うのか」という視点を明確に示すようにした。例えば、サッカーの授業で作戦を考える際には「チームで作戦を話し合いなさい」と指示するのではなく、「これまで学習した、どのフォーメーションを使い、誰をどのポジションにつけるのかを考えなさい」というような指示を行うようにした。また、その話し合いがスムーズに進むような学習カードを作成し、生徒に記入させた。

このような話し合いや教え合いを行う時間は、生徒が中心となるが、それだけでは意見が偏ったり、客観的に見ることができなかつたりすることも多いので、教師が巡回し、積極的に賞賛し、助言を重ねるようにした。生徒たちは、話し合い・教え合いの回数を重ねていくと「ここがいいね」や「がんばれ」などの仲間のやる気を引き出す言葉を使うことが増え、「○○ができているかを見ていて」など、自分で仲間に協力を求めながら、学習を進めることができるようになった。

### ③単元のゴールを意識できる授業づくりについて

「主体的・対話的で深い学び」は大変重要なものではあるが、これは1単位時間の授業の中で実現されるものではなく、単元全体を通して実現していくものである。また、教師自身が単元最後の学習を終えたときの生徒の姿をイメージしておかなければ、単元の目標につなげる授業は作れない。そこで、各単元で単元構想案を作成し、その中には「単元のゴールの姿」という項目を設けた。

さらに、オリエンテーションの時間を充実させることで、生徒にゴールの姿をイメージできるようにした。具体的には、単元1時間目の授業で、生徒に単元のゴールをイメージできるような動画を視聴させた。オリエンテーション後の学習カードには「あんなプレーができるようになりたい」や「今までやったことのない種目だけど、動きのイメージがもてた」との感想を書く生徒が多かった。